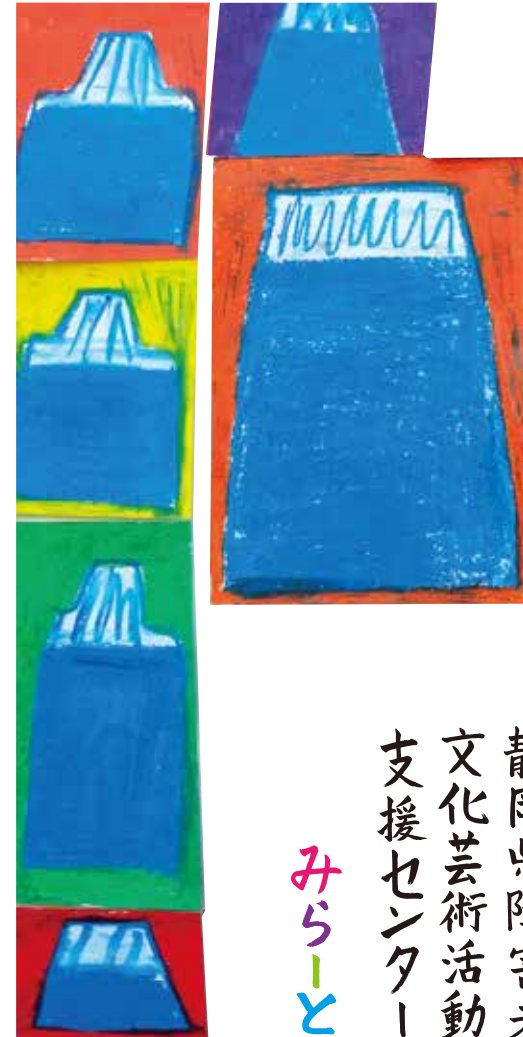


# 風を創る2 ひとたち

静岡県障害者文化芸術活動支援センター **みらーと**  
令和元年度 静岡県障害者文化芸術活動支援センター運営事業 成果報告書



静岡県障害者  
文化芸術活動  
支援センター  
**みらーと**

〒420-0031  
静岡県静岡市葵区呉服町2-1-5 5風来館(ごふうかん)4階

TEL 054-251-3520 FAX 054-251-3516  
【相談受付時間】 平日10:00～17:00

URL <https://mirart-shizuoka.com>  
mail: [info@mirart-shizuoka.com](mailto:info@mirart-shizuoka.com)

表紙作品：片山 裕基 waC(ワンダフル・アート・コミュニティ)  
裏表紙作品：尾城 建一 「世界一の富士山」(一部) 遠江学園みなみ





## 1 ご挨拶

当法人が、「静岡県障害者文化芸術活動支援センター運営事業」の委託を受け、平成30年9月19日に静岡県障害者文化芸術活動支援センター「みらーと」を開設し、今年度で2年度目となりました。

この事業は、障害のある人の文化芸術活動の普及を通して、障害のある人の社会参加と、障害や障害のある人に対する県民の理解促進を目的として実施しています。今年度は、次年度にオリンピック・パラリンピックの開催を控え、各所で様々な取組が展開され、障害のある人に対する活動もより活発に行われました。

みらーとも、地域のニーズに合わせるべく、これまでの中部（静岡市）に加え、東部（沼津市）、西部（浜松市）に新たに2拠点を開設し、体制を強化いたしました。各拠点に相談窓口を設置し、文化芸術活動に取り組みやすい環境を整え、障害のある人や、支援者、福祉事業所等からの相談を受け付けました。また、各地域で文化芸術活動を行っている障害のある人や団体を訪問し、調査・発掘を実施したり、展示会や支援人材を育成するためのセミナーを開催し、拠点を起点に、県内全域で幅広く事業を展開いたしました。

「障害のある人の芸術活動支援・権利擁護を学ぶ」と題して開催したセミナーは、昨年度の「著作権セミナー」をより実践に即した内容に変更し、基礎編を各地、応用編を中部で実施いたしました。応用編では、参加者が講師である弁護士と積極的に意見交換を行う場面が見られ、参加者が得たものはとても大きかったと思います。そして、今年度の目玉は、昨年度開催して大好評だった、障害のある人がモデルを務めるファッションショーでした。「look@me(ルックアットミー)」と命名し、静岡駅北口地下イベント広場にて盛大に開催いたしました。おかげさまでショーは大成功し、静岡における、障害のある人の新たな芸術表現の開花に一役を担うことができました。

このように、昨年度の経験を踏まえ、より充実した活動が実施できたのは、関係した皆様の多大な協力のおかげだと大変感謝しております。今後も引き続き、この経験を活かし、障害のある人の文化芸術活動支援の充実を図って行きたいと考えております。

今後のみらーとの活動にご期待ください。

認定特定非営利活動法人

オールしずおかベストコミュニケーションティ

専務理事

鈴木良夫





# 風 を創る ひとたち 2

## INDEX

ページ

- 01 1 ご挨拶
- 03 INDEX
- 05 2 みらーと協力委員対談特集
- 19 3 発表の機会創出
- 29 4 支援人材の育成に向けた取組
- 35 5 体験の機会創出
- 37 6 障害者芸術活動支援の状況
- 41 7 作家・支援者インタビュー
- 45 8 成果報告のまとめと今後の課題

デザイン・監修：遠藤 次朗(みらーとアートディレクター)



## のびのび自由に楽しく描く 指導して完成度を上げ作品価値を上げる 障害者芸術の目指す先とは

遠藤 ここにお集まりの皆さんは普段からそれぞれの立場で障害のある人のアート活動を支援されていますが、支援の在り方、考え方、手法もまたそれぞれかと思えます。

今回は「みつける」「みまもる」「ひきだす」「そだてる」というテーマでお話をお伺いし、どんなお考えで活動支援をされているのかをその手法も踏まえてお聞きできたらと思っております。

そもそも、障害のある人のアート活動は「のびのび」「自由」に楽しく（アート指導無し、見守ることをメインとした支援）が良いのでしょうか。それとも「指導」して完成度を上げ、（受賞や評価向上等への明確な目的へ向けて）アート作品としての「価値を上げる」ことが必要なのでしょうか。

また障害のある人にとってアート活動やアートの在り方はどのようにお考えでしょうか。様々な視点でお話が伺えたらと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。早速ですが、（資料を見せながら）こちらの作品集は受賞



## 2 みらーと協力委員対談特集

～障害のある人のアート活動のかたち～  
みつける。みまもる。ひきだす。そだてる。

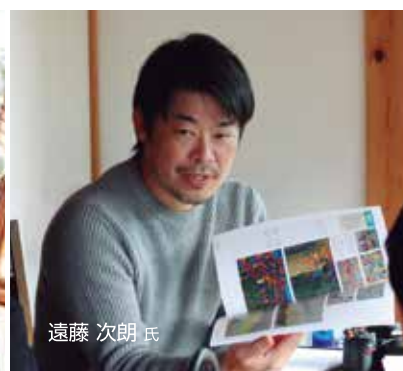
特別支援学校教諭 大学准教授 元特別支援学校教諭 waC代表  
松本 進 × 高橋 智子 × 吉田 恵美子 ×  
NPO法人理事長 就労継続支援B型事業所支援員 みらーとアートディレクター  
風間 康寛 × 鈴木 梨可 × 遠藤 次朗

障害のある人の文化芸術活動を傍で支える支援者はどのようにアート活動に向き合っているのか。アートが目指すその先とは。それぞれの思い。それぞれの手法。立場の異なる熱きサポーターに赤裸々に語っていただきました。

歴も豊富な事業所の作品集なのですが、ここでは美術を専門にしている支援員の方が利用者（障害のある作者）さんのアート活動に寄り添い、作者の個性を大切にしながら創作の支援をされています。「療育」と位置付けられたその活動内容をお聞きした感じでは「指導」をしていると言っても良い内容でした。

例えばまず、美術専門の講師を定期的に招いて創作指導を行っています。そして途中で集中力が切れて投げ出しそうになった利用者にも粘り強く話し掛けて制作の続行を促す、作品のクオリティを上げるための助言をする等で一定の成果を得ています。

片や、別の事業所では全くの自由。アート活動をするを一切強要しない。嫌ならやらなくても良いし、休んでも良い。でも彼らの「居場所」やアート環境は整えていて、支援員は彼らをそっと見守っている、そんな環境の中で彼らは楽しそうに制作に打ち込んでいたのが印象的でした。



遠藤 次朗氏



## 対談者プロフィール



**松本 進**  
Susumu Matsumoto

静岡県立富士特別支援学校富士宮分校教諭／waC(ワック=ワンダフル・アート・コミュニティ)アート活動支援スタッフ



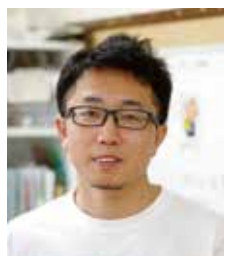
**吉田 恵美子**  
Emiko Yoshida

元特別支援学校教諭／現スープ屋 Hygge(ヒュゲ)店主／waC(ワック=ワンダフル・アート・コミュニティ)スタッフ／みらーと協力委員



**高橋 智子**  
Tomoko Takahashi

静岡大学 大学院 教育学領域 准教授／みらーと協力委員



**風間 康寛**  
Yasuhiro Kazama

NPO 法人エシカファーム 理事長／みらーと協力委員



**鈴木 梨可**  
Rika Suzuki

NPO 法人ひまわり事業団 就労継続支援 B 型事業所 それいゆ 支援員／みらーと協力委員



**遠藤 次郎**  
Jiro Endo

静岡県障害者文化芸術活動支援センターみらーとアートディレクター／NPO 法人アートコネクトしずおか理事



松本 進 氏



鈴木 梨可 氏



高橋 智子 氏



風間 康寛 氏

## 描いていることや、その時間そのものが楽しい 彼らの純粋なアートに「標準」はない

**風間** そもそも彼らは「作る」「創作する」という概念が少ないですよ。自然に生み出している感が強い。とどまることなく延々と続けたりしますね。

**吉田** 描いていることやその時間そのものが楽しいんですよ。上手とか売れるかとかそういう利害的な概念が無く純粋。その場で直接褒めてもらえたりすることが嬉しかったりする。

**高橋** 知識を一方的に教え込むことはしないですね。子どものイメージしていることとそれを実現する知識や技能が天秤のように釣り合うところに指導・支援がある。そのためには、子どもに寄り添い、方法を見極める必要があると思います。方法がわからないと教材キットを使ったり統一した指導法をしたりする方もいるのも事実です。学校現場において、子ども達が驚くほど同じような絵を描いている事もあります。

**鈴木** それはありますね。子どものクラス絵をみたら全員同じポーズで同じ様なカット、同じ様な色の絵になっていたのが驚いた。栄えのよい作品をつくらせたい一心で、○○式と呼ばれる描画方法を用い、画一的な表現になってしまっていることでもあります。何を目的にしているのかが不明確になるんですよ。

**遠藤** 例えば松本先生のように美術教育を盛り上げてきた先生が他校に異動したら、今度はその学校の美術が急に盛り上がりはじめるといった例があります。作品展を見たらそ

ことがあります。先生によって絵の色が明らかに出ていたり。

**風間** 模写をテーマにした題材なら理解できますが、個の感性を重視した表現の授業だとしたら、それは美術やアートの考え方とは違うように思います。

福祉と教育との視点で言えば、標準化を求める教育と個別化を遂行する意味では逆かも知れません。

教育の現場は「標準」を求め、福祉の現場は「個のあり方」を考える。福祉の現場には「揃える」「意識は無いかもしれないですね。」

**吉田** 考え方はいろいろあるけれど図工や美術で「標準化」はあり得ないよね。

**高橋** もちろん、教育現場にはいろいろな考え方があります。教育現場や図工・美術においても、結果だけではなくプロセスを重視し「個」を大切にしています。一方で、図工に対して苦手意識を持っている先生が不安を抱えた状態で図工を担当することもありますが、そうした場合、どのように題材をつくり指導を行うのか悩み迷っている先生もいます。出来

の差が一目瞭然でした。

**松本** 特別支援学校の生徒の多くは、様々な事情であまり多くの時間、美術の授業を受けてこなかった生徒も多いです。

僕は美術ではベーシックな方法としてやり方や描き方は教え、伝えています。

その結果、彼らは純粋なのでとても素直に吸収してくれます。





吉田 恵美子 氏

一方で、教えたことを全く無視してやる子もいますが、それはそれで良いなと私は思っています。

「ここでやり方を示したとしても、彼らは基本「自由」なので「枠」の中に入るような、例えば全部同じになってしまつようなことはありません。

むしろ「枠」から自由に突き抜けた表現をしてくるイメージがあります。そこが面白い。いつもそう思っているんです。

でもその「枠」は伝えようと思つて取り組んでいます。例えば「色は混ぜてみよう」とか、「重ねてみよう」とか。あと「手掛かり」のようなものがあると、彼らはすっと入っていくこともあるので、この「手掛かり」はいつも与えようと思つています。

例えば「フクロウ」の作品の写った画像を見せる（この絵の手掛かりは何だと思いますか？実はこれは白い画用紙の中央に丸い円を2つ描いておいたんです。後はフクロウの写真をたくさん用意しておいて彼らに自由に選ばせる。そして彼らには「よく見なさい」とアドバイスしたり「羽は生えてるけどみな同じじゃないよね」などと形に気付くように促す）

吉田 彼らにとって「自由でいいんだ」という指導は今まであまりなかったことかもしれませんね。

一般的に決まった形を描けるのが上手で褒められるという概念だったのが、ある時から「表現は（自由で良いんだ）」という認識となり花開くようになって素敵です。

松本 あとは褒めることですね。褒めまくります。「いいがすげえ良いよー」と褒めるとその子も「ああ、私これで良いんだー」と自信がつく。「自分は自分で良いんだ」みたいな。

高橋 その子の良さや個性を發揮している部分を引き出していく。その表現において

## こうでなくてはならないという「枠」から突き抜けて いく彼らの自由な表現に爽快感や心地良さを感じます

かせるような話をします。

ここまですると同じ作品になっちゃうかなと心配するかもしれないが、彼らは突き抜けたセンスを發揮するので同じ作品が生まれることはありません。彼らは素直で純粹なんです。それに尽きると思います。

遠藤 彼らが持っている（特徴的な）色彩感覚ですが、カラフルな色使いが全国的に見ても多いですね。色彩の捉え方って彼らにとってどうなのでしょう。色はどのように感じているのでしょうか。

松本 よく彼らにはああいう風にカラフルに見えているという人もいますが、私はそうは思いません。彼らは素直で純粹。それがすべてなんだとて個が大切にされるといふことは、周囲に受け入れられているという自己肯定につながると思います。先ほどお話ししたように、全員同じ表現になるといふのは、指導者や支援者が表現の意義や面白さを実感していないからだとはいふような気がしています。

私も（ワークショップで子どもたちに実演して見せ、子どもに気付かせて欲求を高めていくことはよくします）。

風間 プロンプト（手助け）を入れているというのがよくわかりました。僕のところはアートと福祉だから、彼らの好きなようにやらせてあげようって言うてるんですが、よく考えたら最初からできる人はとっくにやっているわけで（笑）。ある程度プロンプトをした方が彼らにとってはじめの一步が踏み出しやすくてやりやすいのならやってみようかなと思いましたが、自由で良いんだと（今まで）押し通してきましたがそれって実は優しくないかったんだなって。



授業の中で「自由に思うように描けばいいんだよ」、「世界で一つだけの作品をつくらう」とんな言葉を掛けると本当に彼らは真正面から受け止めます。だからこそストリートで人目を気にしないダイナミックで直感的な素晴らしい作品が生まれるのだと思います。

いつも様々な枠組みの中で生活している私たちは、心や身体、思考や表現を制限しています。私は「こうでなくてはならない」という枠組み」を突き抜けていく彼らの自由な表現に爽快感や心地良さを感じます。

高橋 関わっていくことは、すごく大切なことだと思います。また、安心して表現できる環境があるということも大切。アートの世界では、個が認められ解放されると思っています。

皆が安心できるというか、ここにもいい良いんだという自分を肯定できる場所というのが、活動のベースになります。

風間 自分は運営する事業所でブランドを立ち上げて製品を作っているのですが、かなり個性的な絵を描く子がいて、その良さを何とかして伝え





る方法はないかと思つて。

親御さんは自分の子どもがダメだつたりできなかったりするところを指摘してくるんだけど、でもこの子は、こんな個性的でスゴイ絵が描けるじゃないつて。それを形に表してあげることができないと親御さんも自信につなげることができないので「形(製法)」にしたいんです。

うまく描けたから偉いんじゃないつてその子の「個性」を認めるために始めました。

それが自分にはアートだったんです。でも、それだと描ける子は描ける、描けない子は永遠に踏み出せないの、で今まで悩んでいたんですが、今日は良い発見でしたね。

遠藤 (作品を見ながら) これって色々な色を使おうつて言ってるんですか？

松本 色々な色を使おうつて言っています。でも結局その子なりの色に、を見て判断することもあります。

高橋 病弱の体があまり動かない子たちの時も、例えばローラーのスポンジを使うとワンアクションで大きく描けるので、筆とかではなくて状況に合わせて材料や用具を使い分けることもあります。

遠藤 何度も聞いちゃいますが、この色はこの色にしてみようとは言わないんですよね。「誘導」もしないんですよね(一同笑)

松本 最初は形に気付かせるような言葉掛けはします。形を探してこよう。見つけよう。

見守りながら彼らが描いたら、例えば「今回は黒以外の色のついた線をつけてみよう」と言ってみる。色を何色か用意しておいて、線自身はもちろん自分で選び自分で描く。その他の面の部分は、好きな色で塗ってみよう」と進めてみる。

指導にのっとってやる子もいるし、完全に無視してやる子もいる。でもそれはそれで面白い。

うまく描けたから偉いのではなく個性を認めること



なるんです。スゴイめちゃくちゃに使っているようにでもまとまった感じになつたりする。まさに天才ですよ。

高橋 その時に材料は一堂に並べているんですか？

松本 できる限り色数は多く用意しています。

高橋 私も選択肢を多く準備しておくつていうのは絵を描くとか造形するときはすごく気を付けています。色も豊かに準備します。選ぶこともひとつの意思であり、表現であると考えているので。

風間 色だけじゃなくて画材とか道具とかの種類つて増やしますか？

松本 画材は増やしています。この子にはペン、この子にはパステル、この子にはクーピーなどと、その子に合った画材を用意します。それまでの作品、

何度も写真やモチーフに戻ろうと指示はします。「よく見てみよう。これはよく見ると○○だね。実は○○になつていったんだねつて。

一通り塗ると「できました」と持つてくるのですが、まず褒めます。その後、「もっと○○の部分に変化しても良いんじゃない？」とか、美術の経験が少ない子だった場合は少しだけ描くこともします。道具の説明をしたり、見通しを示したりすることをいう事もあります。彼らの作品には、そうした指導が入っています。

でもそれに則つてやる子もいますし、完全に無視してやる子もいる。でもそれはそれで面白いなあ。

遠藤 描き出しに迷っている子に関してはどうですか？ヒントを言つてあげたりしますか？ワークショップをやるつ必ずと言っていいくらい出てくるケースなのですが。

松本 自信のない子ですかね。そう



「じゃあ、この辺から描いてみる。」とか「富士山だったら頂上から描いてみようか」とか。で、描き始めたら「おおいねー」って(笑)

**高橋** 「何色が好き？」とか聞いたり、私が目の前で楽しそうに描いて見せたりとか。病気の子どもには手を添えて一緒に描くこともあります。

最初は動かなかった手に力が入って動き始めたのを確認したら、少しずつ手の力を抜いて行きます。

そうしたら「動き出したねー」と一緒に遊ぶ。そしていつまでも自分が手を添えているのではなくて、きっかけを一緒に見つけていきます。

**松本・高橋** じゃあ指導しているってことですね(笑)。誘導はしません(笑)。「うしろ」とか「つやれ」とかは言いません(笑)。(一回笑)

**遠藤** 逆に「放置」はしないですか？

**松本** いずれは自分で自由に題材を選ん

で「でも」指導」かなと思います。

**風間** 終わりの指導ってしていますか？「もう」で良いよ」って。

永遠と塗りつぶす人がいたらそれをどこで終わらせたらいいのか僕らでもわからないんですが…。

**松本** 取り上げます(一回笑)。「はい！オッキー！」とか言いながら壁に貼っちゃいます(笑)。

出来上がった作品を「飾る」って、子どもたちにとって嬉しいことなんだなと思います。彼らの自信に繋がって行く。

**高橋** 街の中にもすごく自然にアートがあると思いますよね。

美術館だと敷居が高いと思うってしまう人も生活の中にすっとなじんでいっているアートってすごく良いよね。

日本だと芸術と生活が乖離しているよね。歩いていると見上げるアートがある。ある、そんな街って良いですね。

## みんなの中で創作することの大切さと褒められることから始まる進化



で時間を掛けてじっくり描いて行ってくれたらいいなと思います。

**遠藤** 他の人を見て触発されているようなところってありませんか？あの人とっても楽しそうにやっているな、私もやってみようかしらみたいな。

**風間** ありますね。みんな見ていないようで見えていますから。ひとりでも言われてもできないこともあります。

**遠藤** やっぱ一人で作って行くっていうのは難しいものですか？

**風間** (絵の)基本があればいいんですが、全くない人に対しては「好きなように」っていうのは難しいかもしれませんね。段階的に取り組むことは本当に大事だということですね。

**高橋** 他を意識してみんなの中で表現することって本当だと感じます。

ひとりではなく(周りの方に)触発されながら表現するのも、人に見られながらっていうのも良いですね。

直接的な指導ではなくても褒めたり認めたりする

ある時、利用者さんでペンキを塗ることに目覚めた人がいます。

そのきっかけは、比較的時間ができた時に何気なく「これ(コーヒーマグ)にペンキでも塗ってみようか」という誘いでした。誘っているとボンって開花しちゃったケースがあります。

内職で使っていた不要になった箱に数字を描く利用者さんがいて、その表現がとっても素敵だったんです。そこからその利用者さんの「創作」が始まりました。

最初は本当につたない感じだったんですが、事業所内のコミュニケーションから進化し始めました。描くとみんなにスゴイって褒められる。本人も楽しんで描くことで気持ちが落ち着いて良い感じになりました。

自信がつくと素直になってきて親御さんとの関係も良好になりました。

**松本** (絵を見ながら)僕は絵の構成や組み合わせ方などは教えてないですね。彼らなりの持ち味っていうのはやはりとても教えられないです。それはやはり彼らのセンスです。

この辺りは完全に彼女(作者)のセンスです。迷いがいいですね。動きのある良い線ですね。表現しながら変わっていったのかも知れない。



**吉田** 日本人って「アート」っていうと、有名な人が描いたものを買って飾ってみたいな感じになりがちだけど、有名ではないけど素敵な絵が街の中にたくさんあるのって良いですよ。ね。

**遠藤** 素晴らしいアート活動をされている事業所もあります。鈴木さんの事業所も素敵でユニークな作品がたくさんありますよね。

**鈴木** (事業所の中では、描きたい人は決まっているようなところもあるのですが、





現にこうして絵を出しただけで明るくなる話も弾む。元気になる。

鈴木 吉田先生のところの色と数字を組み合わせて描くアメリカの作家さんいましたよね。

吉田 そうそう、この作家さんです（作品を出して並べる）。

シルクスクリーンの作品ですが、この数字や色には彼なりの意味があるんです。7は幸せとか。彼は自分で描きたいものを描いてるって感じですね。

松本 現にこうして絵を出しただけでこんなに明るくなるし、話も弾むし、元気になりましたよね。それがこの子たちの絵の魅力だと思っています。

その魅力がもたになっていろいろな所に繋がっていききました。わかりやすいしダイレクトに伝わってくる。それはまさにこの絵の力です。

吉田 皆にそんな風に見て欲しいですね。絵の向こうにいる人。その絵の世界の「先」を想像してもらえたら良いですね。↵

鈴木 うちの施設でもイベントをやるようになって様々なプロのアーティストさんが出入りするようになってグッと良くなった感がありますね。

それまで単独で描いていただけだった利用者さんの絵を、アーティストさんがうまく盛り上げて作品にしてくれました。

プロの作り手の方が利用者さんの作品など、そこにあるものにヒントを得てグッと伸ばしてくれるので、結果またひとつ上がったいく。

それは私ではできないことなんです。きっかけを伸ばしてもらって目覚めた人もいます。認められたことが励みになって人生が変わっていく。

問題の多かった人が「ここでは何をしても大丈夫」と言ってくれる場があることで解放されていく。

風間 その人が豊かになって自信をもっていけるように支援者は自由な発想で見つけていける存在になりたいですね。

内職だけさせていけば良いんじゃないかって、この人が好きなことって何だろうって。支援

世の中に発信する力を貸して欲しいです。

吉田 作品自体はとっても素晴らしいから、あとはこれをどう発表する場を増やしていくかですね。

風間 発信だけじゃなくて日常や地域の中で発表する「場」を作っていけたら素敵です。描く人、才能を持って生み出す人、それを拾う人や伸ばす人、そしてそれを広げて伝える人などいろいろな役割の人が必要ですね。

風間 僕たちは福祉の立場ですのでその絵をどう使っていかかという事も大切だと考えています。

今日お話を伺ってきて、もっと絵（創作活動）自体に力を入れなきゃと思いました。あまりにも僕らの中に「教えよう」という概念が無かったですね。

それって一見すると良いこと、優しいことに思ったりするんですが、方向性を持ってない人にとってはもう少し丁寧に支援してあげることでも伸びる力を引き出せるかもしれないと今日話してすごく感じました。

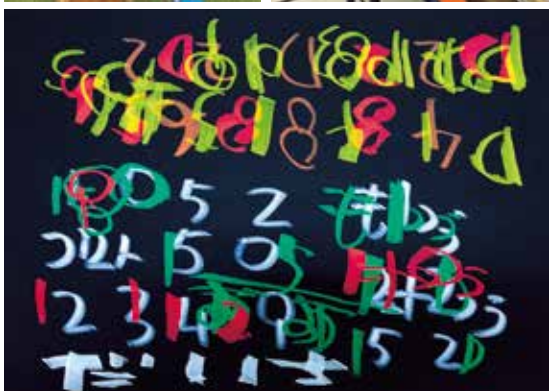
良くも悪くも彼らは原石過ぎて。それをももう少し形にしてあげると本人も周りも受け入れやすいものになっていくかもしれないですね。

松本 デザイナーのような存在の人は必要だと思います。プロの人です。プロの力と素材の力を組み合わせるともっと素晴らしいになりますね。

風間 みらーとさんにその辺上手に入ってもらえると良いですね。うまくまとめて







就労継続支援B型それいゆ 鶴沢 大地 「無題」



waC(ワンドフル・アート・コミュニティ) 石井 秀基 「ポップ・マーレー」



waC(ワンドフル・アート・コミュニティ) 大石 理央 「シシリー島」

## 彼らの作品を前にすると話題が広がっていく アートの魅力に感動

「ここにいるのは」障害のある人たちのアートに心底魅力を感じている人たちなんだなっていうのを強く感じました。  
こんなにいるような立場の人たちを魅了しちゃう彼らのアートの魅力がすごいですよね。

高橋 今日はこの絵を描いた子たちの魅力も皆さんの魅力もすごい感じました。  
この作品を機に話題が広がっていく作品が持つ魅力、アートの魅力に感動しました。出会ったら終わリじゃなくて繋がっていくことがすごく必要だなと思っています。  
べつしても自分のことで精いっぱいなんだけれどこんなに素敵なことをしている人がいっぱいいて、それぞれの方に思いがあるって、そこが繋がっていくとすごくいいことができますんだろなって予感がしました。

遠藤 これからも障害のあるアーティストが生き生きと活動できるように、それぞれの立場や専門性を活かしてサポートしてあげたら素晴らしいですね。今日は貴重なお話をありがとうございました。

松本 私もこの子たちには第三者の支援が必要だと思っています。今日はこうして仲良くなれたのでチームで何かできたら良いなあと思いました。是非また次の機会も作ってやりたいですね。

## 支援者にもユニークさと 多角的なものの見方があるといい

者にもユニークさとか多角的なものの見方があるといい。

鈴木 何かやってみたいけどどうやっていいのかわからない事業所は多いと思います。今日はとても参考になりました。そして「こういう場に居られるのがとても嬉しいです(笑)」。  
立場の異なる方々の「こういう話の場合はとても貴重です。福祉の現場では情報を共有する場がなかなか無いので「こういう場がたくさん欲しいです(笑)」違う視点をもって関わっている方々と話ができるのはすごくありがたかったです。

風間 今日時間が経つのがあっという間でしたね(笑)。  
もともと何かの答えを出す場ではないので。アートって答えや定義って無いじゃないですか。  
こうして立場の異なる方々とのお話はスゴイ刺激になりました。そもそも僕は「教える」という概念が無かったです。  
でもよくよく聞いてみると「口ではなく多少なりとも教えたり、サポートしたりしていた」。  
それを今度はうちの利用者さんたちにも伝えて彼らももっと描いて楽しかった、絵を描くのが好き！っていう人たちを増やしてあげられればなあと思いました。  
最終的な目的って、地域の中に彼らのアートが広がっていくと良いなと。そこには、本人も必要だし、拾い上げる人も必要だし、それを広げていく人も必要だし。

吉田 今日は立場の違う人の話が聞けて良かったですね。





## 輝く笑顔に心がジワリと動いた瞬間

そもそもアートに何を期待するのか。観て感じたからっておなか一杯にはならないし、生活にどうしても必要なものかと言えはそうでもない。

ただ、一つ言えるのであればそれは、良い芸術に出会うことで「豊か(な気持ち)になる」ということだろうか。

そこにはその時間を共にする「芸術たち」がいて、私たちをあの手の手で様々な感情を引き出そうと誘いをかけてくる。

我々はそのような非日常的時間を感じ、共有することで豊かになっている「自分を発見」するのかもしれない。

しかし、その豊かさへと繋がる根源は一体どこにあるのか。今年度のみらーとの挑戦はそこにありました。

人の心を動かすステージの源。それは紛れもなく彼らの持つ純粋な個性。そしてそれぞれ

## 3 発表の機会創出

# 障害の有無にかかわらず花開く 芸術表現のそれぞれ

絵画表現からパフォーミングアーツフェスタ開催へ向けた  
みらーとの新たな挑戦

## 舞台上で演じることで広がる新たな世界

ジャンルに関係なく「自分らしさを見つける」演目。それがみらーとのパフォーミングアーツの考え方。今までにたくさんの舞台を観てきたが、彼らの表現は何にもとらわれない純粋で自由で美しいパフォーマンスだった。

もちろんプロではないから間違えることもある。でも彼らの心底楽しそうに微笑む姿に、心のどこかがじわっと動いた気がした。

の美しく輝かんとする個性に寄り添うサポーターたち。その思いは感動へと導かれていく。

障害の有無にかかわらず感動を生んだ昨年度の障害のある人がモデルを務めるファッションショー。街行く人が彼らの魅力に振り向いた瞬間でした。

今年度は昨年度の発表をさらに飛躍させ絵画展示、パフォーマンスとその発表のシーンを飛躍させた企画を展開。各方面から高い称賛の声を頂きました。

何よりも素晴らしいかったもの。それは演じ発表した彼らの笑顔。何にもかえられないその「答え」に心がジワリと動くのを感じました。







(るっくあっとみー)



(るっくあっとみー)

## Look@me! 開催データ

【来場者数】 約 400 人  
【出演者】 富士山舞台芸術集団 / フラ mokupuni / ダンスチーム  
Weedy Jr. / 須崎賢人ピアノ独奏 / ゆうゆう舎 / ハウリーズ / ファッションショーモデルの皆様

## 前回のファッションショーよりも格段に飛躍した表現の場を創出

これまで主に絵画作品の発表に軸を置いて活動をしてきたみらーとの障害者文化芸術活動支援。しかし、支援事業所や特別支援学校等を巡っていると「芸術活動」に至れない様々な諸事情を知ることとなりました。

例えば障害の問題。絵を描いてみたいが肢体が不自由で絵筆を持つことがままならない。知的障害でじっくりと見ることができない。視覚障害でものを見ることができない、そもそも絵画表現そのものへの興味が薄いなど様々な事情を抱えている方も多い。

そんな中、昨年度、障害のある息子さんを持つお母さんからのファッションショーを開催したいという相談から実現した「障害のある人がモデルを務めるファッションショー」。

百貨店の協力も得て静岡市の中で堂々と披露されたショーは大成功。大きな反響を呼びました。自身の個性を最大限に引き出し演じる舞台パフォーマンスで見ると人の心を魅了したショーの成功は、障害のある人の芸術表現の可能性を大きく広げた瞬間でもありました。

一般にパフォーマンスアートとは「肉体の行為によって表現する芸術」と誤され、「芸術」とは「表現によって鑑賞者と相互に作用することで精神的・感覚的な変動を得ようとする活動」とある。

普段の生活では障害がもたせて我慢を強いられることが多い人も、自分の表現を演じることがで解き放たれ、喜びに満たされる。







## Special thanks

Atelier Hjarta (アトリエ イエッタ) 中澤弘美 /  
LB-MODEL SCHOOL 吉田ちか・青島江梨香 /  
静岡デザイン専門学校 ファッションビジネス科、  
ファッションデザイン科、ブライダル・ビューティ科 /  
HEI.co (ハイカンパニー) 泉栄子・中澤弘美



## program

- 13:30 みらーと開設1周年記念セレモニー
- 13:50 ファッションショー第1部
- 14:15 富士山舞台芸術楽団
- 14:35 フラ mukupuni
- 14:50 ダンスチーム Weedy Jr.
- 15:10 須崎賢人 ピアノ独奏
- 15:30 ゆうゆう舎 歌
- 15:50 ハウリーズ 歌
- 16:05 ファッションショー第2部
- 16:30 フィナーレ

## 芸術表現としてのパフォーミングアーツの新たな可能性

その表現、その行為が普段出会えない人との共感と感動を呼び、繋がりを生み出す。

演じた自分に新たな可能性を感じ、感動を共有できたことで今までにない自分の生き方が見えてくる。

音楽やダンス、演劇など視覚的な肉體表現で見る人の心をつかみ揺さぶる芸術、パフォーミングアーツの演出。これこそが今みらーとが挑戦すべき新たな扉でした。

前回のファッションショーを成功させたスタッフと今回もタッグを組み、県内のパフォーマンsgループ(個人)をリサーチし、出演依頼を開始。

幸い県内にはこれまで様々なパフォーマンsgを披露してきた魅力あふれる団体がいくつもあり、出演オファーの打診により続々と出演者が決定していく。出演者一人一人が皆主役とな

るステージ。そこに誰一人脇役はいない。最高のパフォーマンsgと最高の笑顔を創出し、関わるスタッフや観客と一体となり充実感、達成感、そして感動を共有する。

それにはまず、演じるパフォーマーに最高の環境を提供するのがみらーと最大の使命と考えました。

演者とスタッフ、そして観客



## ショーが始まるずっと前から 感動はすでに始まっていた

が「作用し合える会場構成と舞台デザイン、ひとりひとりを美しく引き立てるヘアスタイリング、メイクアップやフィッティング、衣装コーディネート。

本番を見据えたウォーキングレッスンにポージング練習、メイクアップや衣装の打ち合わせ。

そのすべてが障害のある演者本人のみならず、関わった学生スタッフとの感動的な繋がりや使命感、一体感を生み出す。この刺激的で革新的な日々は更なる感動へと繋っていく。

そしてそれを全力でサポートする専門家たち。会場を軽快な話術で盛り上げるプロのMCの起用と音響設備。ショー全体を設計し統括するディレクター。

障害の状態によってそのパフォーマンsgは人それぞれ。一人一人が主役を演じ、輝くその瞬間を最高の状態で引き出して演出するには様々な方面の専門家の力が必要でした。

実はショーが行われるずっと前から、すでに感動は始まっていたのです。

障害のあるモデルやパフォーマーと、サポートする若者たちの、お互いを認め合い、たたえあうコミュニケーションのなかまにきらりと輝く光を見たような気がしました。

何も変わらない。障害の有無にかかわらず、ショーの会場で輝いている若者達の笑顔に、心を動かされていたのは私だけではなかったはず。





社会福祉法人 草笛の会 八木 優太 「わに」

## 国境を越え誰をも魅了する素晴らしき作品たち

から受ける感動は世界共通なはず。国境を越えた驚きと感動を是非楽しんでもらおうと、作品選定にも熱がこもりました。

何と言ってもラグビー・ワールドカップと言えバリーチ・マイケル氏をキャプテンとした個性あふれる選手たち。

ワールドカップを楽しみにしている作家が描いたラグビー選手達は、コミカルでユニーク。一度見たら誰でもクスツツと笑顔になる素晴らしい表現で人気。来場者を大いに楽しませてくれました。

予想通り、アート展は大成功。来場者は富士山と静岡市内を一望できる壮大な展望の景色と、展示されている素晴らしい作品を存分に楽しんでいました。

また、展示作品のラインナップには選りすぐりの特別支援学校の生徒(卒業生)の作品を多数盛り込みました。

みらいとでは次世代を担う若いアーティストにも着目し、これまでも県内の特別支援学校を訪問して芸術活動の状況を伺い、抱える問題を把握。今後の支援のあり方を模索してきました。これからもみらいとは、卒業後も活動を続ける若きアーティスト達を応援したいと考えています。

生活介護事業所 恵松学園 森 大記 「ちょう」



個性豊かに描かれたラグビー選手たち：waC(ワングフル・アート・コミュニティ)

### 開催データ

【来場者数】 約520人  
【出展作品数】 43作品

## ラグビーワールドカップ開催に合わせたアートによるおもてなし

令和元年9月20日から11月2日に日本国内で開催されたラグビーワールドカップ2019。

アジアでの開催は初となることから、日本各地でラグビー旋風が巻き起こりました。

開催される12都市の内の一つが静岡県袋井市にあるエコパスタジアム。さらに会場に入らなかった観客のための「パブリックビューイング」とラグビーファンの交流の場である「ファンゾーン」が静岡市の駿府城公園内に設けられたこともあり、駿府城公園に隣接し、富士山と静岡市内を一望できる静岡県庁別館21階富士山展望ロビーでのアート展が決定。

静岡を訪れた観光客、インバウンド(訪日外国人旅行者)に楽しんでもらえるアート展を企画しました。

アートに国境はありません。人種や言葉、習慣は違えど作品





アート視察風景：社会福祉法人 草笛の会



地域で息づく作家と社会を繋ぐ。  
新たな発見と関係を構築

# みらーとミニ展

社会福祉法人 遠江学園 みなみ 尾城 建一 「世界一の富士山」

## 東部



### みらーと6月展 東部拠点

令和元年 6月26日(水)～28日(金)  
静岡県東部県民生活センター「ギャラリーぶらざ」  
【出展作品数】19点 【来場者数】102人

## 中部



### みらーと5月展 中部拠点

金澤翔子&ピックアップ作品展

令和元年 5月20日(月)～6月11日(火)  
障害者働く幸せ創出センター 4階  
【出展作品数】23点 【来場者数】181人

## 西部



### みらーと6月展 西部拠点

令和元年 6月25日(火)～27日(木)  
静岡県浜松総合庁舎 1階ロビー  
【出展作品数】8点 【来場者数】171人

## アートをもっと身近に 「地域」を大切にしたいミニ展示会の開催

地域ごとに展示発表の場を設けるといふことの大切さ。作家や事業所、特別支援学校への視察・作家発掘を続ける中で感じたことです。大きな芸術祭で入賞しても展示される場所が遠くてなかなか参加できない…。障害が故に移動には多くの支援を必要とすることから、遠くへ出掛けて行くことが負担になっていく作家の存在は意外に意識されていません。みらーとでは東部・中部・西部地区でそれぞれの地域に居住する作家をピックアップし、地域ごとのミニ展示会を開催しました。

また、地域で息づく企業にも同じことが言えます。地域と共に歩み、信頼を育んできた企業もまた地域への貢献の一環として、こうした活動を一緒に盛り上げていきたいと考えています。素晴らしい作品を描く遠方の作家ではなく、できることなら同地域で活動されている作家を応援したいと考える傾向があります。みらーとでは地域毎に作家を発掘し、応援したいと考えている企業や個人、諸機関に紹介してきました。障害のある作家と地域企業との繋がりが構築できれば、お互いを理解し合い、新しいコミュニケーションが生まれ活性化していきます。これからも静岡県内の素晴らしい作家を発掘し、企業と繋いでいく活動は続きます。



## 魅力を引き出すために学ぶ

みらーとの活動で事業所や作家の自宅へお邪魔する機会が多々ある。作家や作品に会いに行くときよくこんな話を聞くことがある。

「ほとんど描いて(創作して)くれるのは良いのですが(作品が)増えて増えて。ああ、凄いな。今日もよく頑張ったねって褒めると嬉しそうな顔をして。そこに置いてあるんですが、どうしたものでしょ?」

その言われた場所には、画用紙が雑然と積まれ、中には床に置いてある事も珍しくない。

(雑然と)置かれている作品を一枚一枚めくって確認する。描き殴ったような稚拙な作品もあるが、中には目を見張る素晴らしい作品と出会ったこともある。

めくった瞬間、突然飛び込んでくるその作品は、まるでこの出会いを予感していたかのように輝きを放ちその場の空気を一瞬で彩る。

「でたー!」

驚きと感動で体が少し熱くなる

のを感じつつ息を整えながら聞いてみる。

「この作品は素晴らしいですね!他にも見せてもらっても良いですか?」

すると驚きの答えが。

「えーそうなんですか?あー、どこだったかなあ。2〜3カ月前に処分しちゃったかもしれないです。増えすぎて置いて置けなくなりましたものかと思っていたもので…」

実はこうしたケースは少なくない。支援する方の多くはアートを専門としているわけではなく、支援本来の仕事を持っている。描かれた絵の価値を判断し、作品の活用を見出して魅力を伝えることは実際問題、難しいのが現状である。

ではどうしたら良いのか。何から始めたら良いのか。そして我々が何ができるのか。

こうした疑問を解決し、魅力満載の作品を育て、守るための学びの場を提供した。



### 4 支援人材の育成に向けた取組

一緒に学ぶ。一緒に伸びる。  
魅力を伝えるため。そして守るため。

障害のある作家が描いた世界。  
でもこの作品、どうしよう。  
何ができる?何から始める?

今、障害のある人のアートが注目されています。

東京2020オリンピック・パラリンピック文化プログラムの取組の中で、障害のある人のアートが注目され、イベントや展示会、企業広報の一環として活用機会が増えています。しかし、アートが羽ばたけば羽ばたくほど、今までに無かったシーンでトラブルを抱えることも想定されます。トラブルを未然に防ぎ、作品と権利を守るには一体何をすればよいのか。また、作品の魅力をどう伝えたらよいのかを含めセミナーを実施しました。

### 支援者のための絵画支援の実際

利用者への絵画支援の方法を学ぶ



- 【講師】 美術家 乾 久子氏
- 【内容】 ①障害者アートの今  
②障害者アートの可能性  
③くじびきドロ잉ワークショップ
- 【開催日】 令和元年 8月6日(火)
- 【場所】 遠江学園みなみ2階工作室
- 【参加者数】 12人







# みらーと 著作権セミナー

障害のある人の芸術活動支援～権利擁護を学ぶ

守るために学ぶ

【講師】 法テラス沼津法律事務所 弁護士・社会福祉士 山本 明日香氏

2  
応用編

## 作品の二次利用にあたって必要な権利保護を学ぶ

グループワークにより、実際にあるトラブルを検証した。グループ毎に発表した内容について講師による解説、質疑応答を行った。

中部会場 令和2年2月5日(水) 静岡県障害者働く幸せ創出センター会議室(静岡市葵区)  
【参加者数】27人

弁護士と聞いて何を思いま  
すか。そもそも弁護士との接点  
が普段の日常でありますか？  
弁護士と言えば法廷で検察  
官に向かって法を駆使して勇  
ましく立ち振る舞う正義の味  
方、そんなイメージではないで  
しょうか？故にちょっと近寄  
りがたい、ちょっと怖そうな…  
(何か言おうものならたちまち  
論破されてしまう)そんな気負  
いがあるかもしれません。  
みらーとでは昨年度、作品の  
権利擁護というテーマで著作  
権セミナーを開催しました。  
今年度は昨年度のセミナー  
開催以降のアート支援に関わ  
る多くの方々からのご要望を  
踏まえ、更にパワーアップした  
内容で実施。基礎編と応用編の  
2回に分け、よりわかりやす  
く、より実践的な内容で著作権  
について学べるセミナーにし  
ました。

今年は現役の弁護士でありな  
がら社会福祉士の資格を持つと  
いう若き法曹、山本明日香先生  
に講師を依頼。  
山本先生は優しく気さくでと  
ても話しやすい印象の弁護士。  
子どもたちにもわかりやすく法  
律について教えることもあると  
言います。  
参加者の質問にひとつひとつ  
丁寧にしかも的確にアドバイス  
を下さいました。  
セミナーでは著作権に関する  
基本を学んだ後、実際の事例を  
あげてグループでディスカッ  
ション。導き出した解決方法を  
発表後、先生の解説を交えて解  
決方法を探るとい、明日から  
でもすぐに使える実践に即した  
内容。  
実際に事業所で抱える著作権  
に関する質疑応答コーナーも充  
実。参加者から大満足の声を聞  
くことができました。

1  
基礎編

## 著作権と所有権の基礎知識を学ぶ

著作権とは、どんなものか、なぜ必要か。また、所有権とは何かを学んだ。  
実際に施設などで直面している悩みや疑問を、参加者全員で考え、グループごとに発表し、質疑応  
答を交えて、解説を行った。

東部会場 令和2年1月14日(火)  
静岡県総合健康センター会議室(三島市)  
【参加者数】12人

西部会場 令和2年1月22日(水)  
静岡県浜松総合庁舎 703 会議室(浜松市中区)  
【参加者数】18人

中部会場 令和2年1月28日(火)  
静岡県障害者働く幸せ創出センター  
会議室(静岡市葵区) 【参加者数】22人





## アート活動のヒント～創る、魅せる、保存する～(全2回)



【講 師】 静岡大学 大学院 教育学領域  
准教授 高橋 智子氏  
静岡市美術館  
学芸員 安岡 真理氏

【内 容】 ①テラコッタ粘土での制作を通して表現の魅力と支援の方法を学ぶ。  
②作品の取り扱いや展示方法、アーカイブ化(保存、記録、活用)を体験する。  
③福祉事業所や特別支援学校の支援者が、つながりを持ち、今後の連携に役立てる。

【開催日】 令和元年 12月18日(水)  
12月23日(月)

【場 所】 障害者働く幸せ創出センター

【参加者数】 各 22人



## 羽ばたかせるために学ぶ 支援人材育成研修

### 展示会運営と展示の実際～実際に展示することを通して学ぶ～



【講 師】 秋野不矩美術館  
館長 吉川 利行氏

【内 容】 ①展示会運営とポイント  
②アートカードを使っでの研修  
③キャプション作り  
④実際の展示

【開催日】 令和元年 9月10日(火)

【場 所】 遠州信用金庫 多目的ホール

【参加者数】 11人



## ベルナルル・ビュフェ美術館学芸員による展示セミナー 私にもできる展示会作り～作品の魅力を発信しよう～ 効果的な展示方法と展示会開催の考え方



【講 師】 ベルナルル・ビュフェ美術館  
学芸員 井島 真知氏  
雨宮 千嘉氏  
杉崎 有弘氏

【内 容】 ①目的/効果/コンセプトなど  
②広報について  
③展示道具/展示方法について  
④1F 展示ホールで実際の展示ワークショップ

【開催日】 令和2年 2月10日(月)

【場 所】 清水町地域交流センター

【参加者数】 16人



## アートとこころ～障害者の表現と魅力～



【講 師】 美術家 田川 誠氏  
助手 深澤 慎也氏

【内 容】 ①表現・画材・色  
②障害や病気と向き合う方々との関わり方  
③いろいろに描いてみんなでコラボ！  
つなげてパッチワーク  
ワークショップ

【開催日】 令和元年 10月29日(火)

【場 所】 みしま未来研究所 多目的スペース

【参加者数】 14人







# WorkShop & OPEN Atelier

## 開催データ

**オープン・アトリエ 中部** 障害者働く幸せ創出センター  
1回目/令和2年1月27日(月) 【参加者数】19人  
2回目/2月4日(火) 【参加者数】18人

**オープン・アトリエ 西部** 静岡県浜松総合庁舎  
1回目/令和2年1月16日(木) 【参加者数】3人  
2回目/1月30日(木) 【参加者数】8人  
3回目/2月13日(木) 【参加者数】14人

**オープン・アトリエ 東部** 沼津商連会館 1階とも  
1回目/令和2年1月16日(木) 【参加者数】7人  
2回目/1月27日(月) 【参加者数】7人  
3回目/2月20日(木) 【参加者数】8人

**パステル・アート ワークショップ** サントムーン柿田川  
令和元年8月4日(日) 【参加者数】11人

何気ない時間の中から、普段見えなかった  
きらりと光る個性が見えることがあります

この人は何に向いているのか、何が好きなのか  
未だにわからない…。

普段の生活の中で「何かきつと好きなことがあるはず」そんな思いを持って支援されている方も多いのではないだろうか。

内職仕事や通所等の生活内ではなかなか見つけられないその人なりの個性。そんな思いは、毎日の忙しい生活の中に埋もれてしまうことも多いでしょう。

みらーとでは体験を通してその人の個性を引き出す(見つける)ワークショップやオープンアトリエを企画し開催しました。ワークショップはセミナーと合わせて行ったり、地域毎に出前で行ったりしました。

オープンアトリエは東部、中部、西部それぞれの地域で創作の場所と自由に利用できる画材を提供。気軽に参加頂けるように配慮しました。自由に。そして楽しく。その人の特性を引き出す「きっかけ」となるよう自然なスタイルで開催しました。まずは体験してみる。楽しさを味わい、笑顔でコミュニケーションする。そんな何気ない時間の中からきらりと光る個性が見えてくることがあります。

みらーとではこれからも障害のある人の生きがいを見つける「きっかけづくり」を演出していきます。

## 5 体験の機会創出

勇気を出して行ってみる。やってみる。  
何かが始まる。何かが動きだす。

物事は真剣になればなるほど  
わからないことがあふれてくるもの。  
大丈夫。それが「成長している」と  
いうことなのだと思います。

やってみよう。まずはそこから。

これがしたい！あれもやりたい！そんな小さな動機が成長の始まりです。そして自分を変えるチャンスです。今までやったことがないことに挑戦すれば当然のことながらわからないことが出てきます。  
わからないことはすでに実践している人に聞くことで解決へと繋がることは当然なのですが、もうひとつ。やってみることで「新たな人脈と繋がる」という最大の成果を生むことがあります。





## ある時突然出現した素晴らしい才能。その時、身近で寄り添う支援者はどうしたらよいのか。

支援者と話をしていく中で時より出るワードがあります。

「絵が好きみたいで、描いている時はとても落ち着いて集中してくれます。」「問題が多かったこともあるんですが、絵を描くようになってから気持ちに変化がでてきたみたいです。」

きっかけは様々ですが、共通して見えてくることは、絵を描くことで心(精神)の安定や生活の中の過ごし方に変化があるということ。もちろん描く内容(創作内容)やテーマ、モチーフ、テイスト等は人それぞれに様々。しかし時に目を見張る才能を発揮する方が現れます。

そんな時、傍らで支援している支援者は驚きと喜びの中で半面悩みます。…では一体この作品をどうしようか。色々な人に見て欲しい。いろいろな人を知って欲しい。しかし…。

その時湧き上がる悩みは概ね3点。

1点目はこの作品は(自分が良いと思っただけで)出品に値する作品なのかという不安。保護者や支援員の方に多く見られます。作品の素晴らしさに気が付いていないケースもあります。

2点目はこの作品を発表するにはまずどうしたらよいのか。展示に掛かる費用の捻出も難しい中で展示発表を実現する事は可能なのか。

3点目は、この作品の最善な発表の方法は何か。



描いた作品を販売したいと相談があった作品(富士宮市)

## 中部 相談事例紹介 支援部 部長 松本 克彌

作品をより良く「魅せ」、一人でも多くの方に鑑賞いただき、ファンになっていただけの方法は何か。

みらーとでは令和元年から、それまで中部1箇所だった拠点を東部と西部にも配置し、それぞれの地域をより丁寧にカバーできる体制を整えました。

これにより地域ごとで抱える問題点への対処や作家の発掘、相談対応が密になり、多くの成果を上げることができました。

これからもみらーとはそれぞれの地域で活躍する作家・支援する方々へのサポートを進めて参ります。



美術団体スタッフから

### 【相談内容】所有権・著作権について

美術団体に利用者の作品を販売しているが、利用者が在学中に学校の画材で制作した作品を販売する場合に所有権などの問題が発生しないか？

【対応】弁護士と連絡を取り改めてつなぐことにした。みらーと主催の著作権セミナーも紹介した。

みらーと主催の著作権セミナーを同団体の方が受講され、具体的な著作物の権利擁護について学ばれていた。作品の権利擁護に関するセミナー等の実施は、今後も支援者の育成事業として必要だと改めて感じた。

福祉事業所の職員から

### 【相談内容】発表の機会を広げたい

漫画、イラスト類を描いてツイッターで発信している人がある。どうしたら発表の場が広がるか。

【対応】制作した作品を見せて頂き、展示を企画している団体を紹介。すぐに発表の機会が実現した。

支援コーディネーターとアートディレクターが施設職員と本人と面談。ちょうど出展作家を探している団体を紹介し、すぐに出展が実現した。その他、みらーとが企画していた展示会も紹介し、展示を全面的にサポートして発表する機会を創出することができた。

## 6 障害者芸術活動支援の状況

### 作家本人と活動を応援している人の支援

作家と支援者の挑戦をみらーとが応援します。

アートの世界に枠はない。あくまでも自由。しかし…。

表現するということ意識した活動よりも「楽しみ・喜び」として絵を描く人も多い。枠を超えて自由に羽ばたいていく障害のある人の表現活動。しかし、そこからまた新たな悩みや一人では解決できないことが出てくる。自分の表現を発表へと繋げたい。作品を売ってみたいが何からやっていいのかわからないなど、様々な相談にのりました。



# 西部 相談事例紹介 西部支援コーディネーター 竹内 明美

西部での相談内容でのデータは、やはり「発表の機会が欲しい」という切実な願いでした。

私のお手伝いしたことは、「発表できる場所を探す」「発表の機会を創る」ことでした。そのために調査をし、人と場所、人と人を繋ぎ、企画展を計画しました。

そんな活動の中で感じたことは、西部の方々は、思ったより行動する方が多いということ。みらーとが新聞に載れば、「うちの多目的ホールを使って、展示会を開催してください」「ボランティアをさしてください」等のお電話を頂き、結果「みらーと西部拠点9月展」を開催させていただきました。運びとなりました。

また、ワークショップ「オープンアトリエ」では、ボランティアの方々にも一緒に参加していただき、支援の



作品を紹介する松井さん

お手伝いをしてもらい、充実したワークショップになりました。

さて、左の写真は、菊川市の松井久悦さんの作品展の様子です。タイトル「独創的絵画 出会い 通じ変化」は、出会いだけではなく、お母さんの行動力、様々な方々との繋がりによって生まれた久悦さん自身の心の変化の表れなのではないかと思います。

「風を創る」は、当事者の方々だけでなく、保護者、支援者、一般の方々、企業の方々、私たち全員なんだということを変更して強く感じました。

## 文化施設から

### 【相談内容】展示会運営について

展示会を開催することになったがどう進めていったらよいか分からない。運営方法を教えてほしい。

【対応】展示会に向けた全体の進め方をお話しし、参考資料を紹介。展示会運営の研修に参加していただき、その後は個別に相談に応じた。展示の際はサポートに伺った。

西部拠点まで来ていただき詳細を伺う。みらーとで開催した展示会の実際の資料を紹介しながら、進め方をお話しし、人材育成セミナーに参加して研修。その後の質問（周知方法、作品の集め方、文書の書き方、搬出入方法、展示方法等）には、その都度、電話やメール相談、来所相談で応じ、展示会開催の際はサポートに伺い展示会を成功させた。

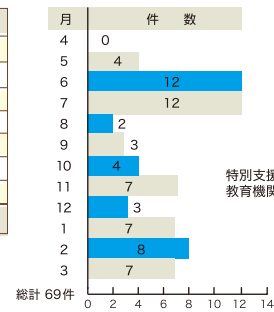
## 【調査訪問件数】

月	訪問件数
4月	0
5月	50
6月	18
7月	51
8月	29
9月	34
10月	47
11月	46
12月	43
1月	30
2月	32
3月	19
合計	399

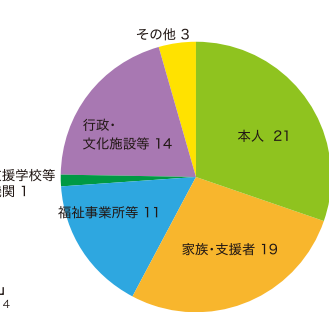
## 【相談分類別件数】

相談分類	件数
活動環境について	3
発表の機会について	41
二次利用・販売について	8
権利保護について	6
広報について	0
みらーとの機能について	2
その他	9
総計	69

## 【月別相談件数】



## 【相談者種別】



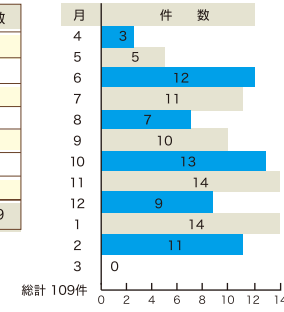
## 【調査訪問件数】

月	訪問件数
4月	10
5月	9
6月	6
7月	9
8月	7
9月	3
10月	8
11月	17
12月	23
1月	23
2月	24
3月	0
合計	139

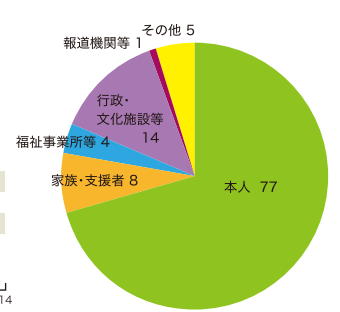
## 【相談分類別件数】

相談分類	件数
活動環境について	5
発表の機会について	34
二次利用・販売について	3
権利保護について	1
広報について	7
みらーとの機能について	6
その他	53
総計	109

## 【月別相談件数】



## 【相談者種別】



# 東部 相談事例紹介 東部支援コーディネーター 星野 栄美

masa.S 螺旋の輝き



昨年5月に新設された東部拠点ですが、「発表の機会」や「二次利用」についてなど様々な相談が寄せられました。相談支援や訪問活動を行う中で、東部はアートによる療育活動が盛んであり、福祉事業所や保護者団体などの支援者が熱心に活動に取り組んでいるということが分かりました。

東部地域のさらなるアート活動活性化へ繋げる為に、個々の素晴らしい活動を蓄積・共有し、今後「みらーと」が外部への情報発信塔としての役割を担う必要があると感じています。

## 福祉事業所の職員から

### 【相談内容】活動環境について

芸術に特化した職員が不在の為、どのような活動をしたら良いか分からない。

【対応】他事業所で行われている活動例やワークショップなどを紹介。また、みらーと主催のオープンアトリエへの参加を案内した。

訪問調査活動を行う中で、アート活動に取り組みたくても専門の職員がいない為どのような活動をしたら良いか分からないという声を耳にすることがあった。ワークショップのアイデア集や材料、やり方等の情報を整理し、ホームページ上で紹介する等の仕組みづくりが必要であると感じた。

## 福祉事業所の職員から

### 【相談内容】発表の機会が欲しい

利用者が制作活動を行っている。絵画の展示や販売へ繋がりたい。

【対応】制作した作品を見せて頂き、みらーと主催の展示会に出品して頂いたことで発表の機会が実現した。

支援コーディネーターとアートディレクターが訪問調査を行った。みらーと主催の展示会開催準備中に寄せられた相談であった為、出展を打診し展示を実現することができた。販売に関しては、静岡県障害者文化芸術振興事業 まちじゅうアートプロジェクトへ作品を登録し、有償レンタルへつなげた。

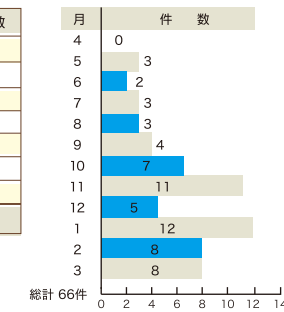
## 【調査訪問件数】

月	訪問件数
4月	0
5月	31
6月	18
7月	25
8月	19
9月	15
10月	13
11月	16
12月	14
1月	25
2月	12
3月	11
合計	199

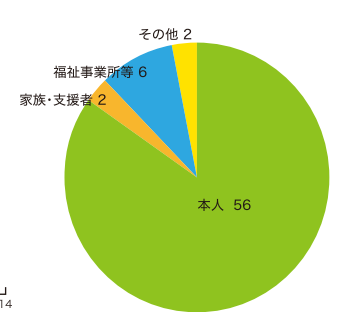
## 【相談分類別件数】

相談分類	件数
活動環境について	12
発表の機会について	5
二次利用・販売について	2
権利保護について	1
広報について	1
みらーとの機能について	3
その他	42
総計	66

## 【月別相談件数】



## 【相談者種別】







Ryota Masuda

7 作家・支援者インタビュー

増田 亮太さん (牧之原市)  
ご家族へインタビュー

waC (ワンダフル・アート・コミュニティ) 所属

絵を描くことが大好きで、特に魚や動物を描いたら天下一品。モチーフを鋭く観察し、線の動きだけでなく、光の変化を捉えて描写します。艶やかでダイナミックな彼の絵は、躍動感と虹色に輝く色彩の美しさが特徴。



際立つ色彩のセンス。モチーフから発する色を独自の表現で見事に描くダイナミックで光を意識した<sup>けんらん</sup>絢爛な世界

「亮太さんのアートは他にないまさに『光る』センスを持っていますね。普段の亮太さんってどんな方ですか？」  
とにかく好きなことがありすぎて困るくらいです(笑)。家ではよくタブレット端末でアニメやヒーローものの主題歌や音楽を聴いています。テレビやビデオ、小型ゲーム機や家庭用ゲーム機などのゲームもよくやります。その他、好きなキャラクターの絵を描いたり塗り絵をしたり。ブロックやアイロンビーズなどの創作も好きです。  
映画鑑賞やテーマパークに行くなど、外出するのも好きで、今はカラオケが一番ハマっているでしょうか。歌うのはやっぱりアニメやヒーローものの主題歌です(笑)。色々なことに興味を持っているのは良い事だと受け止めて応援しています。

「食べ物もお寿司や揚げ物、甘いもの、煮物などが好きで好き嫌いはあまり無く何でも食べます。でもあんこだけはダメなようです(笑)。」  
通所作業所での作業も良好で、今まで行きたくないと言ったことはありません。作業自体は頑張っているようです。  
「いつ頃からアートに興味を持ち始めたのですか？」  
絵に興味を持って描き始めたのは中学生くらいからだったでしょうか。よく覚えていませんが、特別支援学校の美術部に入部させてもらった時から更に絵を描くことが好きになりました。いろいろなことに思っています。







waC(ワングフル・アート・コミュニティ) 増田 亮太 「ふくろう」



What's  
waC?

waCでの活動の様子。藤枝市文化センター2階で第4土曜日の午前に活動しています。見学自由。

### waCの願い

waC ホームページ [http://wac.is-mine.net/ren\\_zheHP/Welcome\\_waC.html](http://wac.is-mine.net/ren_zheHP/Welcome_waC.html)

特別支援学校の生徒達の美術作品には、枠にとらわれない自由が溢れています。素直さ、純粋さで描くことを楽しみ、無心になって表現しています。学校に在籍しているときは、美術の授業やクラブ活動でそのセンスをのびのびと発揮することができます。そしてその作品を発表する場もあります。しかし、学校を卒業してしまうと、その感性を生かして制作する機会もその素晴らしさを発信する場もほとんど無くなってしまいます。せっかく持っている特別な能力や魅力が輝くことなく消えてしまうことは大変に惜しいことです。そこで、彼らに生涯に渡って制作し続けてほしい！そのためにその能力をのびのびと発揮して自由に作品を生み出していける表現活動の場を作りたい。そんな願いから2012年4月waC(ワングフル・アート・コミュニティ)を立ち上げました。主に特別支援学校の教員がボランティアスタッフとして活動のサポートをしています。彼らの絵にはチカラがあります。思いのままに描いたその作品の魅力が自由に感じて、彼らの作品から元気をもらって下さい。waCが彼らにとって大切な場所になること、そのアートのチカラでたくさんの人を繋いでいくことを私たちは目指していきます。

## waCでのアート活動は人生の一部。好きなアートを好きな仲間と。毎月第4土曜日が待ち遠しい

絵を通して出会った先生や周りの仲間から描く楽しみを感じ、教えてもらったからかもしれません。

「亮太さんはワックメンバーでもありますが、活動を続けていくことで何か変わったことはありませんか？」

「月1回あるwaC(ワック)で活動している時はとても落ち着いている気がします。」

「家や作業所では落ち着かない時もありますが、学生時代からお世話になっている先生方の指導のもと、好きなことを好きな仲間と一緒にできることに満足しているのだと思います。作品への取組も自分なりの描き方を模索して楽しんでいくように思います。」

「毎月第4土曜日に藤枝市文化センターで開催されているwaCのアート活動をいつも楽しみにしているので、保護者としてもできるだけサポートしていけたらと思っています。」

「増田亮太さんの絵は光を放つ色彩感覚とダイナミックな構図が特徴的。今まで多くのファンを魅了してきたそのセンスを育て伸ばしてきたのは、何にでも興味を持って取り組む姿勢と家族の惜しみないサポートの中にあつたようです。そして文面でも登場した特別支援学校での運命的な出会いやwaCでの活動が、彼のセンスを開花させてきたのかもしれない。」

「溢れる興味と探求心。家族や仲間たちの愛を受けて育まれてきた亮太さんの光り輝く創作の世界。今後の活躍がとも楽しみみです。」





## 8 成果報告のまとめと今後の課題

# 静岡県下全域に渡って活動を 続けるみらーとの挑戦

特別支援学校生から社会人の作家まで  
文化芸術活動の支援ができる体制を強化

みらーとの活動範囲はより広範囲に。東部・中部・西部それぞれの拠点から地域に根差した活動をこれからも展開していきます。まずは作家や地域環境の情報を把握し、作家発掘やそれぞれに抱える問題点の解決、作品発表のサポート、支援者の育成等、障害のある人の芸術活動支援に全力で取り組んで参ります。

国の障害者文化芸術活動に関する基本計画は、令和元年から令和4年の4年間で、3つの基本方針をあげており、3つの基本方針を実行する施策の方向性も11項目あげられています。

静岡県では、3つの方針を実現するために、相談・調査発掘・作品発表・支援人材の育成と、具体的な活動におとすました。こうした中、私たち「みらーと」の活動1年半の中で、大きく2つの課題を感じています。

始めに、発掘の難しさ。作品や作家、活動家などを発掘する際、何を基準とするか。活動年数かそれとも展示会などの表彰経験か、判断が難しい。作家作品の表現は自由であり、芸術活動に線を引きことはできないと感じています。

次に、相談者との距離感。相談業務で、大切なことは、ある程度の距離感を持つこと。話し方や接し方で相談者は、支援コーディネーターへの依存性が高くなることも多い。注意しなくてはいけないことは、「こうした方が良い」と指示が変わっていくこと。

支援コーディネーターの立場は、あくまでも支援者。立場を超えて、指導にあたってはならないと感じています。

これらの課題に対して今できる解決策は、協力者やコーディネーター、アドバイザー、障害のある人、その相談者との情報の共有化が唯一の解決方法と考えます。

次年度、「みらーと」支援コーディネーターは、地域の支援者と接点を増やし、障がいのある作家に対する連携活動をさらに強めていきたいと考えています。

静岡県障害者文化芸術活動

支援センター みらーと

支援部 部長 松本 克彌

